

# 私の国語教室・随想

## つれづれなるままに

小豆・土庄中 渡邊 美和

教員として働く一方で、母親として家庭を支えるというのはなかなか大変なことだ。私自身、その両立に悩みながらも、多くの方に支えてもらいながら、毎日を綱渡りのギリギリ状態で乗り越えている1人である。

産休・育休で約4年間現場を離れ、その間、感染症によって世の中の「当たり前」が一変した。復帰の4月に近づくにつれ、仕事と家庭の両立なんてできるのだろうか、そもそも、自分が使いものになるのだろうか・・・と不安だらけ。そして、不安を抱えながらの復帰1日目。年度初めの職員会議では、情報量の多さに頭がパンクしそうになった。いざ学校生活が始まると、朝は子どもたちの支度や保育園への送り、学校では授業の準備や指導、放課後には部活動や保護者とのやり取り。さらに、家に帰ると、家事や子どもたちの寝かしつけが待っていた。何より復帰をした当初は、「中学校」という場所に慣れることで必死の毎日。加えて、感染症への対応や働き方改革によって、以前の学校現場の対応が、大きく変化していた。

そんな中、特につらかったのは、家庭での時間が不足してしまうことだ。子どもたちが風邪をひいたり、学校の行事があったりすると、どうしても仕事と家庭の両立が難しくなる。急な対応が求められる中で、仕事の負担もじわじわと感ずることが多かった。

また、仕事も若い頃と比べると、使える時間が少ない分、1つ1つのことに時間をかけることが難しくなった。家庭のことも仕事もすべてのことが中途半端に思え、「こんなやつつけ仕事のように乗り切っているやろうか。」とモヤモ

ヤしてしまうこともしばしばである。それでも、この仕事を辞めずに続けているのはなぜだろうか。それは、「やりがい」と言葉のみで片付けられるものだろうか。

教員という職業には独特の魅力がある。それは単に知識を教えることにとどまらず、子どもたちの成長を見守り、彼らの未来を形づくる一助となることだ。人生の中でも、そう何度もない心揺さぶられる場面で、一緒に悩み涙することがあったり、困難を乗り越える瞬間を目の当たりにしたりすることがある。また、久しぶりに卒業生に出会うと、成長している姿に驚かされることもある。「先生、久しぶり！」と声をかけてくれる教え子や保護者もいる。それら1つ1つのことが、しんどさを感じる私を支えてくれている。

そして、教員としての仕事は、教育を通じて社会に貢献するという意味でも非常に意義深いものだと思う。教育は未来を創造する力があり、自分の出会った生徒たちが将来社会の中で活躍する姿を想像すると、自分の仕事のもつ大きな意味と責任を実感する。最近では、教員を志望する人が減り、「ブラック」な部分ばかりがクローズアップされるし、「大変なんやろ。」と言われることも増えた。確かに、大変やけど・・・でも、この職業を選んでいなかったら、気付かなかったことはたくさんあるし、出会わなかった人もたくさんいる。

これからまた、どんな出会いがあるだろうか。自分自身、どんな風に成長できるかな。母親の先輩である自分自身の母親には、いつも、「忙しいうちが華」と言われる。今のこのドタバタの日々のことを、いつか「あんなときもあったなあ。」と思う日々がやってくるのだろうか。

今日はどんな一日になるだろうか。新たな自分に出会える日になりますように。